

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2272100311		
法人名	有限会社 アイエヌビー		
事業所名	グループホーム「いっしょに暮らそう」		
所在地	静岡県富士宮市杉田1020-2		
自己評価作成日	平成21年11月29日	評価結果市町受理日	平成22年3月5日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhvo-shizuoka.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2272100311&SCD=370
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人静岡県社会福祉協議会		
所在地	静岡県静岡市葵区駿府町1-70		
訪問調査日	平成21年12月9日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

開設から満6年を経過し、認知症の方がそれぞれの個性が活かされたまま、介護度が上がっても元気に共同生活を送っている空間が出来上がっています。これは、ポイントである牛乳の自由化や、自由絵画に包含されている思想が、ホームにおける生活全般にわたり、それぞれの入居者の個性を大切に、かつ、つぶさない心配りをしつつ、自由意思や自発行為も大切にし、認知症の混乱の表現をも日常の中に当たり前のこととして取り込み、共に暮らす環境が作られているからと考えています。この環境は、介護職員が意識的に作り出しているものであり、職員同士の批難よりもそのチームワークを大切に思い、お年寄りへの関心と探求心を持ち、共に行動することから生じる感動を多くの職員間で共有しているからと思います。職員の個性が表出され、自発意思や行為も認められ、各自がそれぞれに生き活きと業務に当たり、その存在を認められている実感が根底にあるからかと思えます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

「認め合い、支えあい、高めあい」を理念に掲げ取り組みを続けている。理念に書かれた姿勢は、利用者だけでなく職員に対しても同様に行われており、職員の「個」を受け入れる姿勢が、自ずと利用者の「その人らしさ」を理解することに繋がっている。ホームは、利用者の持つ「力」を見極め、画一的なケアではなく利用者個人を主人公に、個性に合わせたケアを行っている。利用者へのケアや職員を育てるための様々な工夫には、独自性と遊びの要素が感じられ、のびのびと生活する姿へと繋がっている。ホームの課題のみならず、地域の課題にも目を向け、積極的に情報を発信したり、問題解決に向けた努力を続けている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念は別紙のように定めてある。職員には採用当初、研修で伝え、その後は日常の介護実践の中で、また様々なイベントをチームで企画実施することや、毎月のスタッフ会議などを通して伝え、学びを深めている。	「認め合い、支えあい、高めあい」を理念に掲げ取り組みを続けている。理念の持つ意味合いを具体的に示し、現実の経験を通じて職員が理解できるよう管理者はサポートしている。理念に書かれた姿勢は、利用者だけでなく職員に対しても同様に行なわれており、「個」を受け入れる姿勢が、自ずと利用者の「その人らしさ」を理解する事に繋がっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会には加入は認められなかったが、地域の祭りや行事には参加し、歓迎されている。地域一斉清掃、子安神社・観音様・浅間神社・不動尊の祭典、どんど焼き、小学校のPTA活動へのボランティア参加、アルミ缶・古紙集め協力等で、入居者やスタッフが個人名で呼ばれるようになっていく。また、ホーム主催の地域行事として、創立記念行事、夏祭り、クリスマスコンサートを実施し、地域の方を招き、参加がある。このほか、選挙の投票や入居者の出身地の敬老会に出向くなど、社会的なイベントにも欠かさず参加している。また、近隣の葬儀のお付き合いも行っている。非常勤職員も地域の方を多数雇用したり、近隣の人たちにボランティアに来ていただいたり、野菜をいただくなどで、つながっている。	自治会には、前例がないとの理由で加入が認められなかったが、地域の一員として行事や地域活動に参加している。ホーム主催の行事にも地域住民を招待している。交流を深めていく中で、利用者個人と地域との付き合いができていく。ホームを中心に、寄り合いのような場所を作り、縁側の付き合いができる関係づくりを目指して取り組みを続けている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所職員は認知症キャラバンメイトに5名が登録されている。地元や市内で行われるサポーター養成講座や、家族介護講座等で講師を務めて、実践を伝えている。又日常的に市民や近隣の住民、他のグループホームなどの相談に応じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に一度の開催を行い、ホームの運営方針を具体化した内容や、入居者へのケアの状況、問題点などを伝え、意見をいただき実践に生かしている。また、地元のイベント情報などをいただき参加交流に役立てている。	2ヶ月に1度地域住民、市職員、知見者、利用者、家族等が参加し定期開催している。会議では、日常生活の状況や介護方針、行事、外出、趣味活動等の活動状況が報告され、地元の行事や福祉に関する情報交換も行われている。玄関先や家族便りで会議記録を見ることができる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	毎月のホーム便りを届けたり、日常の運営上の問題について相談を書けたり、スプリンクラー設置など様々な行政手続きや法令の改正のたびに積極的に働きかけをしている。また、行政からの依頼の認知症講座や、実習生の受け入れなどを引き受けている。	ホームは、積極的に市へ働きかけ連携を図っている。運営上の連絡、相談の他、市の依頼を受け、認知症講座や実習生の受け入れを行っている。管理者は、ホームだけでなく地域全体の課題にも目を向け取り組みを続けており、若年性認知症の方のデイサービスや地域の家族会の支援等にも市の協力が得られるよう働きかけている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	平成15年の開設当初から玄関の施錠は夜間のみとしている。このためのリスクは、地域住民の理解と協力で乗り越えている。身体拘束については、書物や研修会への参加で多くの職員が学び、全職員で意識的に取り組んでいる。	身体拘束をしないケアの実践を開所当初から続けている。玄関の施錠をしないことへのリスクに対しては、近隣住民の理解を得ることで対応してきた。利用者一人ひとりの力を見極め、必要以上の見守りは行わないよう個別に対応している。そのため、利用者同士で散歩や買い物に行くこともある。職員が細かな配慮で支えることで実現できており、利用者の精神的な満足に繋がっている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	多くの職員で研修会に参加し意識化と共に、虐待の基になる職員の疲労やストレスの把握と解消に管理者が注意を払い、職員間の認め合い・支え合い・高め合いのためコミュニケーションを増やし、チームワークを取るために様々な仕掛けを工夫している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者は研修に参加し、現在保佐人になって活動し職員にも伝えている。現在利用者の一人は管理者の支援で成年後見制度の手続き進行中である。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	利用開始前の契約時には、重要事項説明書に従い丁寧に説明し契約書を交わしている。その際に疑問や希望などに耳を傾けて応えるようにしている。法令の改定時には、文書でお知らせすると共に、家族会で説明納得していただくようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者の意見や要望は、管理者や職員が、個別に訴えがあったときに随時耳を傾けていると共に、毎月の全員による「寄り合い会」で意見を聞いたり、ケアや運営への満足度や疑問、希望を聞き、その内容はスタッフ会議で確認して改善等に活かしている。	入居・来訪時に家族の要望に耳を傾け、運営に活かしている。また、「家族のつどい」を年に一度実施し、7～8割程度の家族が参加し意見交換が行われている。運営推進会議に家族の参加があり、出された意見を真摯に受け止め改善に向けて対応している。日常的に訪問があり、関係は良好である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	主にリーダー・サブリーダーを置き全職員の意見の吸い上げシステムを作り、定例のリーダー会議、スタッフ会議(毎月一回3~4時間)で細かな協議を行っている。この場で、職員の意見が活発に出ている。意見や提案などは大方受け入れられている。又随時管理者がスタッフの意見を聞く姿勢を持って臨んでいる。1年に一度スタッフアンケートとヒアリングを行い、この場でも様々な意見を聞くようにしている。	毎月1回行われているスタッフ会議では、全職員が参加して、意見を出し合い運営や個別ケアの課題を協議している。会議の中で、3分間スピーチの時間を設けており、職員の間性を互いに知る事がチームワークに繋がっている。また、年1回行っているアンケートでも職員の意見を聞き反映する仕組みがある。ホーム独自に、様々な手当を設けており、職員の働く意欲を引き出している。ストレスや疲労の蓄積を緩和できるよう勤務調整や個別のヒアリングを行い、働きやすい環境作りに努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	ホームの代表者兼管理者は、ケアリーダー・サブリーダーと定期的に会議を持ち、一人ひとりの職員の努力や能力発見、善意の配慮などポジティブな面を拾い上げ、認めるようにしている。結果は、提案手当、自己能力開発手当、お笑い手当、失敗手当などの手当にて反映されている。勤務条件については、子育て中の者、家賃が必要な者など個々の実情に合わせて給与や手当の設定をしたり、希望休、夜勤の回数などの希望に沿って、職員納得の上で行っている。また、スタッフヒアリングで、希望を聞いて応えたり、スタッフ間のコミュニケーションの場を誕生会、懇親会などで計画的に設けたり、前向きに働けるよう、クラブ活動の推奨など様々な仕掛けを工夫している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	代表者はケアリーダー、サブリーダーと共に、職員一人ひとりの能力を判定しながら、職場内研修課題に結びつけたり、資格取得の推奨、外部の研修にも積極的に参加させている。また、職員を育てる最良の方法は、良いケア、良い仕事を実践的にし続けることであることを念頭に置いて日々見つめている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	市内と隣市の同業者集団があり、それぞれまた合同で研修会や実践報告会、新年会の交流会、2カ月に一度の定例会議、運動会などのイベントを行っている。このほか、現在全ホームと市と協同で介護サービスのスキルアップ事業に取り組んでいる。また、随時、他ホームから管理者や職員が見学実習などに訪れ、相互に情報交換を行い運営に役立てている。今年度は特に、介護未経験者の新採研修を3ホーム合同で行った。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ホーム入居にあたって、初対面の人には、家族と共に事前に見学を促し、本人納得の上で入居していただくことを原則としている。その際に不安や希望などを聞いたり、事前に自宅訪問で生活状況など把握し、生活習慣やこだわりが入居後も引き継がれるよう配慮している。入居前に、共用型デイサービスを利用していただくと、本人・スタッフ双方にとって非常にスムーズな入居になるので、入居希望者のデイ利用に配慮している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族とは、事前見学で面接、入居前の訪問面接で細かに不安や疑問・希望などに応え、入居後も面会のたびに代表者が声をかけて、生活ぶりを伝えながら、疑問や希望に応えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入居申し込みの際には、担当ケアマネージャーとも連携を密にし、入居待ちの間の生活の支援方法について、家族・本人の希望を踏まえて、様々な選択肢を提案して選んでいただいている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	日常の生活を共にする中で、調理、洗濯、掃除、漬物、縫物、など様々な面で、過去の経験や、身につけている技などを教えてもらいながら過ごしている。忘年会は入居者に招かれて、居室で行ったりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入居後に疎遠になりがちな家族にも、日常の生活ぶりを伝えながら、本人の不安や体調の変化などで家族の協力が欲しいことなど伝え、関係を作っている。また、家族を交えてのイベントも企画実施している。家族がイベントのボランティアとして協力ももらっている。現在ホームに来訪する面会者は、毎日1～2名(月間数十名)となっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前の人間関係を途切れないように、美容院、病院、近隣の友人知人宅へ出向く支援、社会的な活動集団(趣味の会、踊りの会、民生委員、教師の会、仕事の同僚)の人たちをホームに招いたり、誕生会に合わせて友人と外での食事会を実施したり、出身地の敬老会に出向くなど支援に努めている。	ホームとしては、できる限り馴染みの人や場所との関係が途切れないように家族や利用者から情報を集めたり、出かけていく支援をしている。また、近隣の行事や友人との外出を行うことによって、今まで途切れていた利用者の意識を開拓している。	ホーム側は、入所したら今までの関係は継続できないと考える世間のイメージを無くしていきたいと努力を続けてきた。これからも情報を発信したり、社会的な活動に利用者が継続して参加できるように支援に努められることを期待する。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気の合う者同士のペアが何組かできていて、支え合いが日常的に見られる。重度になり会話もできなくなると孤立しがちになるので、外出や行事、レク等の集団活動を活用して、支え合いの場作りや、互いの存在を意識できるようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	過去に在宅復帰した方に、職員が復帰後の介護支援を行ったり、3年前遠方の病院に長期入院で退居になった方の家族に、連絡を取って様子を聞いたり、その家族がホームに立ち寄って、職員や入居者と会話したり行われている。また、亡くなった方のご家族は、毎年梅狩りに招待してくれている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	管理を可能な限りしないことで、重度の方でも自然に生活習慣ができ、一人ひとりの思いが表出されるのでそれを大切にしている。また、入居当初、家族にアンケートをお願いして過去の暮らしぶりや生活習慣やこだわりなどの把握に努めている。	利用者一人ひとりに、担当の職員が中心となってスタッフ会議で気づいたことを伝え検討し、思いや意向の把握に努めている。また、一日個別対応の日や回想法、人生カルタ作り等を通して、過去の生活習慣や思いを共有し、把握に努めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前アセスメントや、入居当初に家族アンケートをお願いし、趣味特技をはじめ、生活歴などを把握し、ケアに生かしている。入居後は、回想法等で引き出している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	職員は、一人ひとりの日常に関心を持ち、持ちえている能力の開発や把握に努め、ケアに活用している。随時変化する心身の状況は、管理者・スタッフ間で共有し合い、記録にとどめ、時期ケアプランへの反映に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	計画作成担当者と、ケアリーダー、個別担当者、とケアプラン作成や見直しを行っている。必要に応じて、本人や家族の同席などもいただいている。	ケアプランは、本人の希望を重視し、家族やかかりつけ医、職員が意見を出し合い作成している。家族アンケートによる情報提供を基に、課題分析を行い、ケアプランへと繋げている。現状に即した内容となるよう見直しもを行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の様子を個別介護記録に残して、職員間で回覧し共有している。また、特に重要で急を要することなどは、連絡ノートで全職員に伝わるようにしている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	グループホームは、入居者の全生活を支えていることから、個別に随時起きるニーズに対応している。医療機関への家族に代わっての定期受診介護、知人宅への送迎、個人的な買い物介助、墓参り介助、その他個人的な要望への支援など。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	自治会、学校、PTA、地区社協、民生委員、地域寄り合い処、婦人会、農協婦人部、在宅介護支援センター、地域包括支援センター、行政、公民館、医療機関、ボランティア、地元職員など関わりがある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は、入居前の医療機関を原則としている。家族や本人の希望があると、それに沿っている。入退院の面談にも家族と共に職員が参加し、医療との連携に努めている。	かかりつけ医は、入居前から本人の状況を把握している医療機関を継続して利用している。原則として定期受診は家族が付き添うが、都合が悪い場合や同席が必要な場合は、職員が同行している。看護師とも連携を図っており、毎週訪問している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携体制を取っており、職員は入居者の心身の変化を観察し、必要に応じて、24時間体制で相談に応じてくれる看護師に連絡を取って、的確な対応に努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	利用者が入院の際は、医療機関との連携と、家族との連携を密にしている。入院治療の終了の見通しが立った時点で、家族の希望に添えるようホームでの退院後の受け入れ態勢や医療機関の支援について協議している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者が重度化した場合、医療への受診を促すとともに、医師から予後指導を受け、ホームでの介護が可能な条件の提示と今後のホームにおける生活でのリスクと他のサービスの利用についてを説明し、家族全員の希望をまとめていただくとともに、職員会議での話し合いを基に、管理者、ケアリーダー、家族で話し合いを持ち、双方の理解と納得の上で引き受けることとしている。	利用者が重度化した場合は、医師の判断を仰ぎ、ホームでケアが可能かどうか慎重に協議し、家族の希望を確認した上で、ホーム側の「できること・できないこと」を示し、他のサービスの利用も検討しながら、共有の方針を決定している。また、居室は家族が宿泊可能なスペースがある。	常勤看護師配置の問題や、医療面での課題がある。重度化や終末期のケアには、職員の思いはあるもののできることに限界がある。また、想定される様々なケースによる職員の意識は一定ではない。チームとしてのスキルアップと医療面での課題に向けて、継続的に取り組まれることを期待する。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	利用者の急変や事故発生時に備えて、看護師、管理者への緊急連絡体制の整備と対応マニュアルを整備し、職場内で全職員を対象に徐々に研修を行っている。が、実践力を全員が身につけているとは言い難い。求められている力を身につける方法が不明。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災と地震については想定避難訓練を年間2回行っている。防災計画を現在練り直し中。昼夜を問わず、全職員が、想定できない実際の災害時に、的確に利用者の安全保護を行うには、困難があると思われる。地域、近隣には協力体制がある。	火災と地震の避難訓練を、毎年2回実施しており、マニュアルや連絡網を作成している。また、近隣に声を掛け、協力を仰いでいる。備品は、水や食品、毛布などを用意している。	消防署や近隣住民との合同訓練や夜間訓練など連携を図った訓練の実施を継続的に行い避難方法を身につけると共に、職員の意識向上に努められることを期待する。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	集団ケアや、一律平等主義的ケアは行っていない。職員体制や能力の範囲内での可能な限りの一人ひとりの思いや、生活習慣、自発行為などを侵害しないように努めている。重度化しても人としてのプライドを失っていないことを意識し、個別の疾病情報、家族や経歴などのプライバシー情報については、本人の心を傷つけないよう配慮している。	可能な限り一人ひとりの人格や思いを尊重し、利用者の誇りを傷つけないような対応や言葉掛けに配慮している。また、日頃の会話の中に表現されている利用者の思いに耳を傾け、何を欲しているのかを汲み取る努力をしている。プライバシー情報についても、利用者、家族の了解を得て、適切に取り扱われている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	牛乳(飲み物)の自由化を行っている。(本人の決定によって、好きな時に、好きな所で、好きな飲み物を好きなだけ飲める状況作りをしている)。また、自由絵画をはじめとした、芸術活動等で本人の思いを表現してもらい、そこからのメッセージを職員が受け止めケアに生かしている。希望は管理の強化で失い、全てが今のままで良いと認め続けることで湧いてくることを職員が知っていて実行している。希望は日常の中で察知し、誕生会などのイベントを通して、遠慮がちだが随所で出ておりそれを可能な限り受け止め応えている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	重度化して意思表示が十分できない利用者に対して、本人の希望を受け止めて、職員の都合でケアしていないかは常に課題として悩んでいる。活動的な入居者に対しては、日々のその人らしい暮らしの支援をしているかと問われると、集団生活という制約、職員が1対1でないことなどの条件から十分ではないと思われる。が、可能な限り沿っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	日常的には普段着、かなり頻繁に行っている外出時には外出着、ハレの日にはおしゃれ着とお化粧品など支援し、変化を持っている。散髪、整髪、毛染めなども希望により支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作りは毎回入居者と共に行っている。車いすなど重度の方にも、可能な限り手を出していただく機会を作っている。片付けは、入居者が自主的に行っている。メニューは、それぞれの嗜好に沿っている。食事環境についても配慮し、ホーム内では、テレビは消し、誕生日やイベントの食事は、テーブルカバーや花で飾りをしたり、バイキング形式をとったり、職員が様々な外国料理を作ったりで変化を持って楽しんでいる。また、ペランダでの食事や流しソーメン、芝生の庭で太陽を浴びてのガーデンランチなどで楽しみ、外食の機会を設けたり、弁当持参で花見や公園でのレクリエーション、ピクニックなど多彩に行っている。そこでは、普段自ら食べない人が箸を持ったり手づかみで食べ始めたり、お代りをする姿など感動的な場面が詰まっている。	食事が何よりの楽しみであることを職員が重視し、季節の食材を使用したり、彩りを工夫するなど見た目も良く、食べても満足できるように心がけている。食事の時間は利用者のペースに合わせ、ゆったりとくつろげるようにしている。利用者は、声掛けをしなくても準備や片付けを自分の意思で行っている。また、外食に出掛けたり、ペランダのスペースを利用した流しそうめん(年数回)やガーデンランチを行う等食事を楽しむ機会を作っている。個人の食習慣に合わせた対応も行っており、主食の変更や嗜好品も取り入れている。	ミキサー食などは、どうしても視覚に訴える点で、食欲をそそる要素としては工夫が必要なため、どの様な工夫をしたら良いか、職員や外部の人の意見を聞くなどして、見直されることを期待する。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	介護度が増してきた方には、食事、水分摂取量のチェック表をつけて不足しないように注意している。体重測定なども目安に、栄養不足にならないよう配慮している。摂取が十分でない人には、夜半や食事時間以外でもカロリーや水分補給に努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔内の清潔保持支援は、必ずしも毎食後ではなく、過去の生活習慣や個別の能力に合わせて行っている。重度になり十分な清潔保持ができない方は、歯科医を受診し口腔ケアを受ける支援をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄は最優先の介護としている。失敗やおむつでの排泄はプライドを傷つけ、混乱を増幅し、受け身になり生きる意欲を減退させるものとの認識に立って行っている。ターミナル期に入って亡くなる3日前までトイレでの排泄介助をした。可能な限り普通のパンツで過ごすことを目標にし、紙パンツ等は外出時などの安心の為に使用に心がけている。	排泄は、人間の尊厳の最後の砦と位置づけ、できる限り本人の意思でトイレに行くことを促している。そのために排泄リズムを確認し、職員が気遣い失敗しても本人のプライドを傷つけない介護を心がけている。外出の際には、安心の為に紙パンツを使用するなど、状況に合わせて柔軟な対応を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘は体調だけでなく認知症状をも刺激するので、排便は毎日チェックしている。健康な便を作るために食物や水分の摂取、運動に配慮している。また、薬によるコントロールは最小限にしている。薬で常時下痢状況だった人には、医師、家族と相談の上、薬の飲み方を調整することで、普通の便になっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴は、本人の希望時間に沿うこととしている。湯温や湯量、入浴時間などでもできる限り本人の希望に沿っている。介護度の高い方には、夕方の職員体制が整っている時間帯で二人体制等で入浴介助を行っている。入浴剤の利用や、ゆず湯なども行い、楽しめるようにしている。入浴中は会話や歌などでスタッフと共に楽しんでいる。しかし、入浴拒否がある人への対応には苦慮し、様々な工夫を試みている。	入浴は本人の好みを重視し、希望する時間に入れるようにしている。介護度の高い方には、職員体制が整っている時間帯にゆったりと入れるように工夫している。また、季節に合わせてゆず湯にしたり、入浴剤を使ったりと楽しめるように心がけている。風呂が嫌いな人には、様々な工夫をしているのが記録から伺える。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	夜間不眠の場合は日中に休んでいただいたりするが、外出や活動に誘って夜間睡眠がとれるよう働きかけている。就寝時間もそれぞれの習慣で行っているため、午後8時から10時ころまでまちまちである。安心して休めるよう、光や音、かけ物、湯たんぽなど季節に応じて対応している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	9割以上の方が服薬している。自己管理は全員が不可能の為、すべて職員が支援している。薬の作用副作用などの効能は、薬剤師の発行する薬剤説明書にあるものを職員全員が読み、理解している。症状の変化にも注意し、変化のあったときには看護師や医師に報告し指示を仰いでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	最近、全体レクや全体行事を減らし、個別や少人数で行う「クラブ活動」を開始した。これにより、入居者一人ひとりの経験や嗜好能力に合わせて、職員の個性も相まって様々なバリエーションにより活発な活動が始まっている。例えば、生物クラブでは鶏を飼い始めて、新たな仕事と役割分担が出来上がっている。三味線クラブでは入居者が何十年振りかでばちを持ち、初心の職員と共に練習に励み、元気を増し、ホームに三味線が響き渡る日がある。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	一人ひとりのその日のすべての希望に沿うことはできていないが、近所の散歩や、ホームの食材の買い物のほか、個人の希望の買い物、知人に会いに行く、ニュースや新聞で話題になった場所に希望で出かける、季節の実感の為に希望の場所に外出する、希望によって外食をする、歴史散歩をする、文化会館での催し物に参加する、様々なお祭りに参加する、花見に行く、地域行事に参加する、お墓参りをスタッフとする、家族とホーム職員で日帰りや宿泊温泉旅行をする、夜間のイルミネーションツアーやホテル狩りなど、外出は盛りだくさんである。	建物の外には、車通りも少なく歩道となる道が至る所に通じているため、散歩や個別の買い物、知人に会いに行く等の外出は利用者が自由に行える環境にある。ホームの買い物や受診も職員が同行し、日常的に出かけている。また、近隣の祭りや催し物にもできるだけ参加し、季節毎に花見等にも全員で出掛けている。誕生日には、利用者の希望に沿った外出プランを立て実行し、家族に感謝されている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	職員は金銭トラブルを回避したが、ホームの方針として、ご家族に理解と協力をいただき、できる限り本人にお金を持っていただくように努めている。紛失や盗難騒ぎなど保管にトラブルがあるが、職員との触れ合いの好機として、話を聞き共に探すことにしている。外出の際には財布と現金を持っている。買い物の機会を作る。お金の使い方を忘れていたり、家族やホームへの土産などを買う姿はうれしい。このほか、金銭に関する刺激を目的に、節分には現金をまき、イベント時に現金つかみ取りや富くじ抽選などで現金を手にしてもらい、その後、職員と共にコンビニなどに買い物に行くこととしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族との電話でのやり取り、時に手紙や年賀状のやり取りなど支援をしている。親族から果物が送られてきたり、誕生日のプレゼントが届いたりしたときには電話や手紙で直接本人からお礼を伝える支援をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居心地の良さは個々に違い、特に共同生活における、音や光・温度などは難しく、職員の判断によっている。大方の人は楽しそうに過ごしていても、共用空間の人混みや雑音を避ける人もあり、やむを得ない状況もある。その他は、不快な環境についてはできる限り排除するよう心がけ、草花や季節感のあるものなどを飾ったりしている。	共有の空間は、玄関から食堂兼リビングに続く廊下も広々としており、至る所に手作りの椅子やソファ、机が配置されている。リビングから戸外に直接出ることができるように段差をなくし、利用者が気楽に利用している。手すりやスロープ、段差解消の工夫もされ、安全に配慮している。また、建物の内外を問わず季節感を感じる物が豊富に配置されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	玄関外にはベンチとテーブル、室内の廊下にもベンチとテーブルを配置し、少人数で気の合った人同士が集ったり、一人で外を眺める人、職員と共に語り合ったりしている。入居者同士が居室で語り合っている姿も日常的に見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室の必要物品は、原則個人が使い慣れたものを持ち込んでいただいている。仏壇と位牌や古い筆筒、テレビ、ベッド、炬燵、アルバム、賞状類などがある。	居室には、本人が使い慣れた家具や仏壇、趣味の道具が持ち込まれ、思い出の品も大切に置かれている。職員が手作りした誕生日のプレゼントには、ホームへ来てからの歩みが記録されていて、回想するために役立っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	自分の居室、トイレ、エレベーター、階段などそれぞれの判断で使用している。判断が十分でない人の為に、個別に居室に名前表示や、トイレ表示などを行っている。		